

徳永直の会会報

第74号

巻頭言

徳永直の会会長 高木 陽助

昨年五月一日、新天皇が即位され、元号も令和に改まりました。秋には即位御礼のパレードなど様々な宮中儀礼が開催され、大々的に報道されました。

一方、災害国日本を思わせるような三度の台風、豪雨、洪水氾濫、京アニメや首里城の火災など未曾有の災害が発生し、多くの尊い人命が犠牲になりました。

世界的な温暖化等に伴って、地球環境が大きく変貌しているのかもしれない。令和の新時代、私たちはどう生きるべきか。

一九四二年（昭和十七年）、直四十三歳、『泣かなかった弱虫』、八月には九本の作品を纏めた『幼ない記憶』を発表しています。前年の十二月八日、日本は太平洋戦争に突入、緒戦の勝利に酔い総動員態勢に入っていく頃です。臆病者だと自己認識しながらも転向した直が「まへがき」でどのように書いているか、紹介したいと思います。

偉大なる大東亜戦争が進行しており、わが皇軍は海のかなたで日夜戦っている。これはまさに世界的な聖戦である。

そういふさなか、大東亜戦争勃発以前に書いた諸作品を一冊の本に纏めるには、作者自身いろいろと反省さるべきこと、検討さるべきことを作品のうちに感じられないではなかった。そ

目次

・ 巻頭言	高木陽助：p 1
・ 「他人の中」の本文をめぐる問題	和田 崇：p 2
・ 文学散歩⑩『泣かなかった弱虫』	緒方宏章：p 7
・ 二〇一九年会計報告・二〇二〇年予算案	：p 8
・ 第四十二回「孟宗忌」の様子	：p 9
・ 第四十三回「孟宗忌」及び	
「2020（令和）二年総会」案内他：	p 10

ういふ意味ではこの一冊もいくらか過度的な匆々とした面影をどめてあるであらうと思ふ。

しかし私自身としては、つねに庶民生活の健全な明るい面に憧憬をもち、それを描きだすことで、より益々人間のはたらく尊さと、庶民生活の溢れる健康さ快活さを、強化し向上する一助ともならばとねがってゐる。そしてつけて充分ではないまでも、少くもその何分かくらいは、この作品自体が読者諸君に物語ってくれると信じてゐる。（中略）

しかしつまり、おしなべて庶民生活がもつまつとうな明るさ、健康さといったものを作者がおひもとめてゐるといふことだけは読者にも理解していただけたかと思ふ。もちろん作者の才能がそれをどれ位成し遂げてゐるかといふことは自信をもてないにしても。

作者はもつと訓練に訓練をくはへて、読者と共に、真に新時代の作家たりたいと希っている。云々。

「皇軍」、「聖戦」「大東亜戦争」などと言う言葉がのっけから出てくるとビックリしてしまいますが、当時の直の置かれた状況です。鎧の下にはしっかりとした作品に対する自己主張があります。

「他人の中」の本文をめぐる問題

三重大学教育学部准教授 和田 崇



一、はじめに

二〇一八年五月に開催された「徳永直没後六〇年記念講演会」は盛会のうちに終わった。熊本朗読研究会の皆様による「他人の中」の朗読劇に始まり、直木賞作家の中島京子氏のご講演、そして、中村青史、浦田義和、金野文彦、各先生方と私で行ったパネル・ディスカッションと、たいへん充実した内容であった。およそ一年半前の出来事であったことが嘘のように、今でも鮮明に覚えているが、ここで記念講演会のことを紹介したのは、盛会であったことを回顧することが目的ではない。本稿の目的は、この会を機縁として私に課された宿題を、解決することにある。

記念講演会の終了後、会場にいらした知人のNさんから、「他人の中」の本文が自分の読んで来たものと違うのはなぜかという旨の質問を投げかけられた。Nさんの読んで来られたのは、筑摩書房版『現代日本文学大系59』に収められた本文で、これには第九章までしか掲載されていない。ところが、朗読劇で読まれた本文は、熊本出版文化会館版『徳永直文学選集』に収録のもので、第十三章まであったのだ。「他人の中」については、一読者に留まり本格的な研究をしていなかった私は、この疑問に即答ができず、今日に至るまで明確な回答をしないままになっていた。

そこで、本稿では、Nさんの質問への回答として、なぜ諸本によって収録されている本文の長さが異なる（後で説明するように、正確には長さだけでなく文章自体も異なる）のかを明らかにすると

ともに、諸本の異同を確認するうえでもう一つ浮上した、検閲による伏字の問題についても考察したい。

二、九章版と十三章版

まず、「他人の中」という同じ表題の作品であるにもかかわらず、九章版と十三章版が混在する理由を、同作品の書誌を整理することによって紐解きたい。

初出誌（初めて掲載された雑誌）

① 「他人の中」『新潮』三六年四号、一九三九年四月一日

* 第一章～第九章

② 「夢の棲み家」『知性』三卷一―一―号、一九四〇年一月一日

* 第十章～第十三章

初収録単行本

③ 『昭和名作選集第6 八年制』（新潮社、一九三九年一〇月一日）* 第九章まで

再録本（著者生前）

④ 『短篇集叢書 結婚記』（河出書房、一九四〇年一月一日）* 第十三章まで

⑤ A 『新日本名作叢書 他人の中』（新興出版社、一九四六年四月二〇日）* 第十三章まで

⑤ B 『新日本名作叢書 働く歴史』（新興出版社、一九四六年九月二五日）* ⑤ A の異装版。第十三章まで

⑤ C 『はたらく歴史』（新興出版社、一九四八年八月二五日）* ⑤ B の異装版。第十三章まで

⑥ 『はたらく一家』新潮文庫（新潮社、一九四八年八月三〇日）* 第九章まで

⑦ 『現代名作選・中学生全集68』（筑摩書房、一九五二年一月二五日）* 第一章～第二章を抄録

再録本（著者死後）

⑧『現代日本文学大系59 前田河広一郎・伊藤永之介・徳永直・壺井栄集』（筑摩書房、一九七三年五月二日）＊新潮文庫版『はたらく一家』が底本、第九章まで

⑨『徳永直短篇選集』（徳永直文学碑をつくる会、一九七六年一月一日）＊新潮文庫版『はたらく一家』が底本、第九章まで

⑩『日本プロレタリア文学集25・徳永直集2』（新日本出版社、一九八八年三月二五日）＊新潮文庫版『はたらく一家』を底本とし、掲載誌を参照、第九章まで

⑪『徳永直文学選集』（熊本出版文化会館、二〇〇八年五月一日）＊『他人の中』版が底本、第十三章まで

そもそも、「他人の中」は①の時点で第九章までしか発表されておらず、その①をほぼそのまま収録するかたちで③の単行本が刊行された。その後、②の別名で続編が発表され、④になって初めて「他人の中」という表題に統一された第十三章まである本文が収録された。その後、終戦直後に刊行された⑤A\Cでは、後述する伏字を復元するかたちで十三章版が踏襲された。ところが、⑥の文庫版を刊行した際に、第九章までしか収録されず、しかも⑤A\Cとは異なる伏字の復元がなされた。つまり、⑤群の本文と⑥の本文は、第九章までか第十三章までかという本文の長さだけでなく、その内容も微妙に異なっているのである。そして、Nさんが読まれた⑧を筆頭に、その後の⑨⑩においても⑥が底本（本文を決定する際の原本）となつて長らく九章版が読まれ、⑪になつてようやく再び、十三章版が多くの読者の目に触れることとなつた。

一般的な読者の感覚として、九章版と十三章版とは後者の方が長いため、十三章版をより完成された本文と認識するはずだ。しかし、名だたる研究者や評論家が編集に携わつた⑧⑨⑩の選集では、前者が、正確には九章までしかない新潮文庫版『はたらく一家』が

底本として採用されてきた。

その理由はおそらく、文学研究における本文決定の慣習によるものであろう。従前の文学研究においては、「作者の意図」を尊重する傾向が強く、作者の生前最後に出版された本を決定稿（基準となる完成された本文）と見なすことが暗黙のルールとなつている。このルールに則れば、⑦が生前最後に出版された本となるわけだが、これは中学生向けに漢字を平仮名にひらき、第二章までしか収録されていなかったため、⑥が決定稿と見なされたのである。

よつて、Nさんの質問への回答は次のとおりである。本文決定の暗黙のルールに則つて、著者の生前最後に出版された本の本文を尊重する編集が長らく行われてきたため、多くの図書館に蔵書されている古い選集では九章版が収録されている。これに対し、このたび朗読劇で読まれた最新の『徳永直文学選集』版は、著者の生前最後の版ではなく作品の完成形を志向して本文が編まれたため、終戦直後に刊行された十三章版が採用されている。そのため、九章版と十三章版の違いが生じてしまった。

ただし、⑥の新潮文庫版『はたらく一家』で、それ以前に刊行されていた新興出版社版の諸本を踏襲せずに、わざわざ短縮してまで九章版を収録したのは依然として謎のままである。これについて明確な答えを得ることはできないが、あくまで仮説として、③の『昭和名作選集第6 八年制』版を底本とした可能性が高いとだけ指摘しておきたい。なぜなら、左に示すように、⑥と③では収録作品の構成が非常に似ているからである。

・『はたらく一家』（三和書房、一九三八年一月二五日）の収録作品

「はたらく一家」「彼岸」「父親の覚え書」「陽子・道代・町子」「最初の記憶」「弱い強盗」「梶川ツルの死」「木槿のある村」「冬空」「八年制」

③『昭和名作選集第6 八年制』の収録作品

「八年制」「他人の中」「最初の記憶」「彼岸」「電車の中で」「飛行機小僧」
 ・『はたらく一家』（桜井書店、一九四一年四月二〇日）の収録作品

『はたらく一家』『彼岸』『父親の覚え書』『陽子・道代・町子』
 『最初の記憶』『梶川ツルの死』『木槿のある村』『浅草の客』
 『八年制』

⑥『はたらく一家』新潮文庫版の収録作品

『最初の記憶』『彼岸』『他人の中』『八年制』『飛行機小僧』
 『陽子・道代・町子』『はたらく一家』

右に示したように、『はたらく一家』と同名の短編集は戦前に二度刊行されており、戦後に刊行された⑥の新潮文庫版の収録作品は、それらと重なるところが多い。ところが、戦前版の『はたらく一家』には二冊とも「他人の中」は収録されておらず、他の短編集から本文を引張ってくる必要があった。そこで参照にされたのが、おそらく③の『昭和名作選集第6 八年制』であったのだろう。いや、単純に収録作品の適合率から考えると、「電車の中で」を除いて6分の5が一致する③の本を軸に⑥は編まれたとも考えられる。

三、伏字復元の問題

さて、長らく宿題となっていたNさんの疑問には答えられたわけであるが、本稿を執筆するために調査を進める中で、もう一つ見逃せない問題が浮上してきた。それは、検閲による伏字の問題である。『徳永直文学選集』の「あとがき」の解題箇所において、「例外として『飛行機小僧』は初出をテキストとした。というのは、『飛行機小僧』を収載した『八年制』（新潮社、一九三九年一〇月）のテキストは、時局の影響からか初出時の重要な部分が大幅に削除されており、かつ文意がまったく逆になる箇所もあるなど、『文学的表現』

の域を越えるものだったからである」と書かれているように、同じく『八年制』に収録された「他人の中」も多くの表現が削除されている。この問題に言及しないでは、「他人の中」の本文について論じられたとは言えないであろう。

本会報の読者にもご存知の方が多いと思うが、戦前には、書籍（印刷された文書図画）を対象とした出版法（一八九三年制定）や、新聞・雑誌などの定期刊行物を対象とした新聞紙法（一九〇九年制定）といった法律が存在し、内務大臣を長とする内務省警保局が、検閲をすることで出版物を取り締まった。主に「安寧秩序ヲ妨害シ又ハ風俗ヲ壊乱スルモノト認ムル文書図画」（出版法・第十九条）が取り締まりの対象となり、さまざまな表現活動が抑圧された。また、検閲方法は時期によって異なるが、昭和期には事後検閲となっており、出版社にとって経済的損失の大きい発売禁止処分（通称「発禁」）にならないように、編集者は細心の注意を払って校正を行った。その「付度」の結果として生まれたのが、「伏字」という制度である。

牧義之『伏字の文化史・検閲・文学・出版』（森話社、二〇一四年）によると、伏字には、危険な箇所を外国語や暗号で表記したものや、白紙や黒塗り、削除箇所を別添にするなどさまざまなヴァリエーションが存在したようだが、昭和初期を研究対象とする私が多く目にするのは、「*」や「△△」といった字数分を記号で隠したものの、あるいは「九字削除」といったようにまとめて削除された字数を表記しているものである。それらに加えて、削った字数分を空白で表記しているものも多くあり、本稿で問題としている『昭和名作選集第6 八年制』ないし「他人の中」の伏字は、その空白表記である。

では、具体的にどのような表現が問題となったのか。先に指摘しておく、「他人の中」の伏字には、「安寧秩序」に配慮したものと「風俗壊乱」に配慮したものとの方々が確認できる。「安寧秩序」が問題となったのは一箇所、第三節の冒頭、直少年が「海軍大將になる」夢を抱くまでの過程が語られる場面である。「風俗壊乱」に

⑥「□最初ナポレオンのやうに大統領になるつもりであったが、日本には天皇陛下があつて都合わるかつた。それで総理大臣にならうと思つた。」(九三頁四〜五行)

先に⑤群と⑥とは別の本文であると結論つけたように、(二)でも、伏字の復元方法が異なっている。たしかに、「大統領」と「天皇陛下」に言及しているという点においては、文意は同じと見なせるかもしれない。しかし、「大統領」として言及しているのがアメリカの「ジョージ・ワシントン」かフランスの「ナポレオン」かは大きな違いである。ちなみに、ナポレオンは一般的に「皇帝」というイメージが強いが、皇帝に即位する以前、統領政府において第一統領(Premier Consul)に就任しており、「大統領」の表記は間違いではない。

両者の違いを考えるうえで、字数にもこだわりたい。①の伏字の空白は五〇字であり、⑤Aの復元では七四字、⑥では四七字を費やしており、⑥の方が初出時に近い字数で文字を埋めていることがわかる。また、⑤Aの字数が多くなった原因は、「何となく大統領の坐り場所がない気がした」と、やや解説的な一文が追加されたことによることも明白だ。

徳永直自身がこれらの異同に言及していないため、これも仮説の域を出ないが、フランスではなくアメリカの大統領にし、右の一文が追加されたのは、戦後のGHQ(連合国最高司令官総司令部)による検閲に配慮してのことではなかったか。終戦後、GHQ傘下のCCD(民間検閲部)によって一九四九年十月まで続いた出版物等の検閲では、十項目にわたる「プレスコード」が規定され、その項目の一つに「連合国にたいして、事実上反し、またはその利益に反する批判をしてはならない」というものがあつた。実際、大井廣介が「徳永直・ゴシップ的方法による試論」(『近代文学』一九五四年二月号、のち『文学者の革命実行力』青木書店、一九五六年所収)で証言しているように、徳永は占領軍の検閲に敏感になつていたよ

うだ。そのため、ジョージ・ワシントンの名を出してアメリカを称揚しつつ、それが連合国(アメリカ)に対する「批判」ではないことを弁解するように、先の一文が付け足されたのではないだろうか。

四、おわりに

徳永直による占領軍の検閲への配慮という私の仮説が事実だった場合、それは民主主義文学者らしからぬ日和見主義的な行動であるとの批判も成り立つであろう。しかし、権力による支配の中で自身の表現活動を守り抜き、その中に批判意識を内在させる創作方法は、戦時中の徳永が体得した手段であり、一概に肯定はできないにしても、反対に、全面的に否定することもできないのではないか。

フランスの歴史家、思想家であつたミシェル・ド・セルトーは、他者の権力の場で「自分に固有の空間をもつていない状態で、しかし計算された行動によつて何とかそこで生きたり、障害を切り抜けたることを」「戦術」と呼び、その「戦術」の一環として「ペルルク」を取り上げた。「ペルルク」とは、「本来は自分の時間を資本にゆずりわたしているはずの時空において、工夫して自分の快楽を追求すること」である(上野俊哉・毛利嘉孝『カルチユラル・スタディーズ入門』筑摩書房(ちくま新書)、二〇〇〇年)。

「他人の中」の直少年は、丁稚奉公の住み込み住居という、まさに時間も空間も小資本家に支配された状況において、権力者の時間を盗んで講義録を読み、知識を得ようと努力する。さらに、先輩たちのように奉公で得た賃金を芸者遊びに費やし、後輩をいじめるとも伴いながら違和を表明している。直少年の言動は「ペルルク」の一つの表れであり、「他人の中」は、日常生活の中でどのように権力に抗うかを描いたテクストであると言えるだろう。

これと同じように、アメリカの大統領の名を記し、「何となく大統領の坐り場所がない気がした」という弁解的な一文を付して、終

戦直後に伏字のない「他人の中」を再発表したことも、決して支配者への服従ではなく、できるだけ自然なたちで伏字を復元し、権力に抗う作品を、より完全に近いかたちで読者に示そうとした努力の結果だとも考えられるのではないか。そして、民主主義を標榜しながら反共を掲げる占領軍の本性が明らかとなった一九四八年に、アメリカへの配慮を撤回して、フランスのナポレオンに変更した、そうした可能性も考えられるのである。

文学散歩⑩

緒方 宏章

『泣かなかった弱虫』

わたくしは四十いくつという大人だから、ちよとど諸君のお父さんぐらいの年配です。わたくしはべつにえらくも何ともない人間ですが、諸君より永く世の中に生きてきたから、諸君よりもいくらか多くのことを見たり、聞いたたり、おこなったりしてきています。

それでわたくしが諸君のように少年であったころの、たのしかつたことや、かなしかつたこと。また大人になってからもたびたび思い出すような出来事を、お話ししようと思います。

わたくしは少年のころ、ひどく弱虫だった。いまでも強虫とはいえないが、子供のころはもつとひどかった。

「弱虫毛虫、つまんですってろ。」

という。ホントに弱虫はよくない。

わたくしも弱虫などよいとは思っていませんでした。しかしそう思っている、すぐ泣かされてしまう。意地の悪い友達、わたくしが泣きだすのを面白がって、よけいいじめる。

わたくしは九州の人間で、熊本市のある小学校にあがっていたが、一年生から六年生までの間、クラス一番の弱虫はわたくしでした。

弱虫はすぐあだ名をつけられる。わたくしは顔色がよくなかったので、「青びょうたん」をりやくして「青たん」とよばれました。いくらわたくしが弱虫でも、あだ名はうれしくない。わたくしはそんなやつにはけんめいになってへんじをしない。出来れば相手にもあだ名を云つてやる。「何だい、はげ」とか「何だ、えぼうし頭」といったぐあいです。ところが相手が強いやつだと、すぐ喧嘩になって、たちまち、わたくしはなぐられたり、ころがされたりして泣きだしてしまふ。

諸君も知っているように、弱虫というのは身体が小さいとか、力が弱いということとはちがうようである。わたくしはクラスで一等の弱虫だったが、背はたかい方で、力も弱い方ではなかつたのです。五年生のころ、体操の時間に、先生が行司になって相撲をとらせられたことがあります。わたくしは先生が行司になっているから安心したのか、いっばいの力をだして、大きいやつを四人たおして雑記帳を褒美にもらつたことがある。

それでも先生がいらないところでは、やはり一等の弱虫でした。

「やい、きさま生意気だぞ」

意地わるが、肩いからせてすり寄ってくる。

「何が生意気だい」

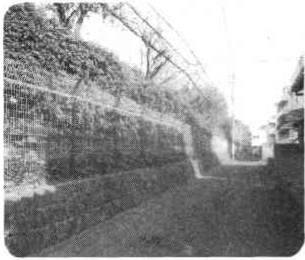
わたくしも最初のうちは負けないうちやはり肩をそびやかしてみよう。こんな小さいやつには負けぬだろうと思つてみる。しかし、睨みあっているうちにんだん相手の眼がこわくなってくる。どんなことになるかも知れんという気がしてくる。それで、

「このやろー」

とばかり、一つぶたれると、もうたましいがどつかへ消えてしまふ。ちよつとこづかれただけで雷でもおちてきたほど怖ろしくなってしまう。



齊々覺高等学校正門付近



済々黌高等学校南側の土手

その時の「ある中学校」とは、今の県立済々黌高等学校だと思われる。同高校のHPによると、明治十二年十二月に創立された「同心学舎」を出発点とする同校は、その後明治三十四年八月に「熊本県立中学校済々黌」と改称し、昭和二三年に「熊本県立済々黌高等学校」と改称するに至っている。徳永直は、明治四四年に「黒髪尋常小学校」を卒業しているの、「ある中学校」とは「熊本県立中学校済々黌」だと思われる。

小学校での体験を記した後、小学校を卒業した「わたくし」は、一、二年して米屋で働いていた。ある春の日の正午過ぎころ、「ある中学校」の土堤（どて）下を車をひっぱっていたら、不良少年のHと子分一人に嫌がらせを受けた話しへと続く。

こんな意地わるの子供の面白がり方もよくないが、またわる者にむかってすこしもてむかいできない弱虫もよくない。だから先生だつてあんまりいつものことだと、泣いていてもかまわくなるし、強虫でりっぱな子供も、しまいには同情しなくなる。わる者に対して、たとえかなわぬまでも力のありつたけをだしていれば、同情にあたいするけれど、ちよつとこづかれてもワアと泣きだす弱虫は、けいべつされてしまうからです。（徳永直選集Ⅱより）

わたくしが泣かないで、意地悪をぶちかえすなり、とつくんだりすれば、三度に一度は勝つたかも知れぬし、勝たないまでも、意地わるどもは、そういじめなかつたにちがいない。意地わるどもだつて、たとえ勝つにしても、自分も痛いめをみなければならぬとすれば、面白づくではやれぬからです。ところがわたくしは、すぐワアツと泣いてしまう。ワアツと泣きだすやつにはてむかいは出来ない。だから意地わるどもには、いいおもちゃです。

2019年会計報告

2019年会計報告			
収 入		支 出	
繰越金	105,122	事務関連費	0
会費(38人)	76,000	通信関連費	27,374
利子	0	総会関連費	0
寄付	41,000	碑前祭関連費	5,358
		会報関連費	71,280
		くまもと文化振興会費	20,000
		HP関連費	3,802
		積み立て	50,000
合計	222,122	合計	177,814
積立金	0	繰越金	44,308

以上の通り相違ありません。

2019年12月28日

会計 荒木 恵

会計監査の結果、問題はありません。

2019年12月28日

監査 田中 耕二

2020年予算案

2020年予算案			
収 入		支 出	
繰越金	44,308	事務関連費	10,000
会費(40人)	80,000	通信関連費	25,000
雑収入	692	総会関連費	5,000
		碑前祭関連費	10,000
		会報関連費	40,000
		くまもと文化振興会年会費	20,000
		HP関連費	4,000
		積み立て	0
		予備費	11,000
合 計	125,000	合 計	125,000
積立金合計	50,000		



献花の様子



高木会長挨拶



金野氏による献詞



献酒の様子

第四十二回「孟宗忌」(平成三十一年二月十日)



「孟宗」に参加された方々

第四十三回「孟宗」と

「二〇二〇(令和二)年総会」のご案内

期日 令和二年二月十五日(土)

一 第四十三回「孟宗」

受付 午後一時三〇分から

時間 午後二時から

会場 立田山登山口(泰勝寺入口)

二 徳永直作品朗読会

時間 午後三時三〇分から

会場 ガーデンパーティー(上通り草葉町)

作品 『町子』

朗読 熊本朗読研究会

解説 中村青史氏

三 二〇二〇(令和二)年総会

時間 午後四時から

会場 ガーデンパーティー

四 徳永直を偲ぶ会

時間 午後五時から

場所 ガーデンパーティー

会費 三、五〇〇円(当日いただきます)

会費納入のお願いと会員募集について

会費未納の方は、同封の振替用紙で納入されるよう、お願いいたします。なお、「孟宗忌」当日も受け付けます。

また、新規の会員を募集しています。活動に関心のあられる方のご紹介をお願いします。